守護神

2006（平成18）年11月14日鑑賞〈角川ヘラルド試写室〉 ★★★

監督＝アンドリュー・デイヴィス／出演＝ケビン・コスナー／アシュトン・カッチャー／セラ・ウォード／メリッサ・サージミラー／ブライアン・ジェラーティ／ニール・マクドノー／クランシー・ブラウン／ボニー・ブラムレット（ブエナ ビスタ インターナショナル（ジャパン）配給／2006年アメリカ映画／139分）

……御年52歳を迎えたケビン・コスナーが「守護神」と呼ばれた伝説の救難士（レスキュー・スイマー）の役に取り組んだが、その物語のパターンはまるで『海猿』と瓜二つ……？　日本の海上保安庁（カイホ）とアメリカのアメリカ沿岸警備隊（USCG）の組織体制とその役割をきちんと学びつつ、「So others may live ……」を合言葉として人命救助の使命感に燃える救難士たちの姿に感動したいもの。もっとも「バディ」を重視する日本型と個人の能力＋チーム力を重視するアメリカ型との相違点の認識もしっかりと……。

アメリカ沿岸警備隊（USCG）はアメリカ版カイホ……？

プレスシートによれば、アメリカ沿岸警備隊（USCG）は、「1790年に財務省の管轄として設立されたUSCGは、アメリカ合衆国の統合組織の中で５番目に小さい組織でありながら、法の執行権を有し、捜索救難、海洋汚染の調査から沿岸警備や監視まで、幅広い任務に当たっており、2004年以降は国土安全保障省に属し、『Always Ready』、つまり『常に備えよ』をモットーとする」とのこと。また、レスキュー隊員の中にはエクストリーム・スポーツのアスリート、外科医、精神科医、聖職者たちが混じっているところが、この組織の特長とのこと。したがって、これは1948（昭和23）年５月１日の「海上保安庁法」の施行によって発足した日本における海上保安庁（カイホ）と同じような組織……？　そして「カイホ」は、『海猿』（04年）、『LIMIT OF LOVE 海猿』（06年）の大ヒットによって一躍日本国民に認

知されることに……。

カイホに所属する「潜水士」は、『海猿』で私が詳しく評論したように（『シネマルーム４』115頁参照）、全国11管区から毎年２回、選ばれた14名が50日にわたる厳しい訓練を経て、それを卒業できた者だけに与えられる資格。それと同じように、USCGのレスキュー・スイマー（救難士）になるのは至難の業で、1984年に正式に議会の承認を得たレスキュー・スイマー・プログラムを突破しなければならず、現実にそれになれるのは志願者のわずか１％にも満たないとのこと。

そんなUSCGと救難士の姿を描いたのがこの映画だが、日本の観客は既に『海猿』でかなりその実態を検証済み。したがって、アメリカでは伝説の救難士＝守護神の物語は珍しいかもしれないが、日本では……？

バディよりも個人＋チーム……？

『海猿』を観て観客が学んだのは、「バディ」の重要性。そして、『海猿』も『LIMIT OF LOVE 海猿』も徹底的にそれに焦点を当てて物語をつくっていたが、それは日本人が友情物語が大好きなため……？　これに対して、USCGではバディという概念はあるものの、それはあまり重要視されず、個人＋チームの力が徹底的に教え込まれている。

冒頭シーンに登場する伝説のレスキュー・スイマー、ベン・ランドール（ケビン・コスナー）による救助シーンも、バディとの二人三脚ではなく、あくまでベンの個人プレイだし、伝説のレスキュー・スイマーという称号も、あくまでベン個人を称えるもの。カイホの海猿も、USCGの救難士もその任務はほとんど共通しているが、日本とアメリカではそんな違いがあるのが面白い……？

教官と教え子は『スパイ・ゲーム』と同じ……

「バディ」に焦点をおくと主人公は若手２人となるが、それではケビン・コスナーを主役とする映画をつくることができなくなる。また、犯罪捜査においては、刑事は必ず２人１組で動くのが日米共通の原則だが、前述のようにUSCGではバディをそれほど重要視していないよう……？　そこで、それに代わるコンセプトは「横の２人」ではなく「縦の２人」、すなわち、教官と教え子という設定。つ

まりこの映画の主人公は、今はUSCG志願者の中でも特に選ばれた者しか入学を許されない、レスキュー・スイマーを目指す者たちの聖地「Aスクール」の教官となったベンと救難士を目指す新人ジェイク・フィッシャー（アシュトン・カッチャー）の2人。

そんなコンセプトを確認しながら思い出したのは、アメリカ中央情報局（CIA）の教官ミュアー（ロバート・レッドフォード）とその優秀な教え子ビショップ（ブラッド・ピット）の2人を主人公とした映画『スパイ・ゲーム』（01年）（『シネマルーム1』23頁参照）。ケビン・コスナー主演の『守護神』の出来具合を評価するためには、日本の『海猿』と『LIMIT OF LOVE 海猿』との対比とともに、『スパイ・ゲーム』との対比も不可欠……？

訓練風景は日米共通……？

この映画は2時間19分と長いが、それは映画中盤における「Aスクール」での訓練風景を執拗に描いているため。その風景は『海猿』のそれと基本的に同じで、かなり徹底したもの。またそれは、今や日本の傾向として定着している「ゆとり教育」と正反対の「振るい落とし教育」の典型的なもの。

ちなみに、アメリカの「海兵隊」は、太平洋戦争はもとより朝鮮戦争やベトナム戦争で名を馳せた荒くれ兵だが、その中に女性兵士が男性と対等に入っていく姿を描いたすごい映画がデミ・ムーア主演の『G.I.ジェーン』（97年）で、その訓練風景も歴史に残るもの……？　他方、大日本帝国時代の日本陸軍の「しごき」は日本人には有名だが、これは世界的には全く通用しないもの……？

それはともかく、潜水士か救難士かは別として、己の命を賭けて海難救助任務のプロとなるための訓練はそりゃ過酷なもので、スパルタ教育は当たり前。ところで、あなたはこの映画を観て、エリート育成のための訓練風景は日米共通と見る、それとも日本の海猿訓練よりもUSCGの救難士訓練の方が過酷と見る……？

「死んでも守り抜く」というフレーズには違和感が……

この映画のキーワードの1つは、「死んでも守り抜く」というもの。Aスクールでの過酷な訓練を経て、やっと1％の確率で救難士になるエリートたちは、人

命救助とは何か、そして逆にどういう優先順位で人命救助をするのか、すなわち、救助できない人が生じてくるという現実をどのように見つめるのかということを学ばなければならない。スイマーとして抜群の能力を基に競技会でたくさんの輝かしい記録を打ち立てた水泳チャンピオンのジェイクは、そのプライドを胸にAスクールに入ったが、鬼教官のベンの教えはそんな自信をボロボロに砕くものばかり……。そんな中、ベンから教えられたのは「死んでも守り抜く」というものだが、これってホントにアメリカのAスクールで教えているもの……？　だって、私に言わせれば、「死んでも守り抜く」などという教えは、かつて「神風特別攻撃」を唱え、実践した大日本帝国ならわかるが、合理主義の国アメリカではかなり違和感のあるフレーズでは……？　そんな精神主義が横行したのでは、海猿はもちろん、救難士たちの活動にいろいろと問題が生じるのでは……？

男女問題　その１――選ぶものは１つだけ……？

この映画が長尺モノになったのは、救難士としての男の生き方だけではなく、それを支える女性の姿も同時に描こうとしたため。その第１は、伝説のレスキュー・スイマーと称えられるベンを夫に持った妻ヘレン（セラ・ウォード）との間に必然的に発生する確執。そりゃ、自分の任務に忠実に生きているベンはいいだろうが、いつも死と隣り合わせの任務を背負い、いついかなる時でも海難救助の必要が発生すればすべてを犠牲にして家を飛び出していくベンとつき合う妻のヘレンはやりきれないに決まっている。これは、11月12日に観た韓国映画『サッド・ムービー』（05年）における、消防士の恋人を持つ女性と同じもの……？
消防車のサイレンが鳴ればそれだけで彼氏の生死を気づかう恋人と同じように、ヘレンも海難救助の要請に応じて直ちに出動していくベンの姿を見るたびに、その心が疲れ果てたのは当然。しかし、夫のベンはそんな妻のつらい気持は全く理解できなかったよう……？　その結果、ヘレンが選択した結論とは……？

ヘレンにしてみれば、ベンが選ぶべきは、妻との愛かそれとも人命救助の任務か２つに１つだということだが、それはベンには容易に理解できないもの……。この映画はそんな熟年の男女問題をうまく描いているので、その展開と結末に要注意！

男女問題　その2――カジュアルとは……？

もう1つ面白いのは、若い男女の「カジュアル」なつき合い……。ベンから将来を嘱望されているジェイクは、水泳の記録について自信を持っているだけではなく、女にかけても自信家のよう……？　ある日、Aスクールの仲間たちと出かけたバーで出会った美女エミリー（メリッサ・サージミラー）を「モノにできるかどうか」という無茶な賭けに彼は堂々とチャレンジ。そして、その結果は……？　結果オーライとなったのは、ジェイクの実力というよりもエミリーの機転と言った方が良さそうだが、そういう講釈はともかく、ジェイクが賭けに勝ったことは事実。そしてその後も、カジュアルなボーイフレンド、ガールフレンドとして、セックスを含む関係を続けることになったのも事実。

そこで問題は、この「カジュアル」な関係とはどういうことかということ。これは今風の日本語で言えば「セックスフレンド」とも言うべきもので、お互いをしばらない、互いに必要とする時だけ会い、求め合うというどちらかというと男に便利な男女関係……？　Aスクールで救難士を目指して頑張っているジェイクがそれを望んだのは当然だとしても、美女のエミリーが同じようにそれを望んだのは、私としては意外……？　ところが、ジェイクが大失態をやらかしたことによって晴れのデートの約束がボツとなったことをきっかけとして、エミリーはきっぱりとジェイクとのカジュアルな関係を打ち切り、本来の目標である教師の職についたが、この長尺モノの物語は、きっちりとこのカジュアルな男女関係についても律儀な決着を……。もっとも、そんな結末を多くの観客が望んでいるのかどうかは別問題だが……？

「新旧交代」は世の定め……？

いくら有能なレスキュー・スイマーのベンであっても、数多くの出動をすべて成功させたわけではない。ベンが現場の第一線を退きAスクールの教官となったのも、ある任務で救出に失敗したばかりか、バディの命まで失うという最悪の結果になり、心に深い傷を負ったため。Aスクールで鬼教官となって教え子たちに真正面から向かっていったのは、ただ現場の厳しさを教え子たちに身体で覚えさ

せるためだった。そんなベンの厳しい「振るい落とし教育」の中生き残ったのは数名だけだったが、その中に成績優秀だが問題の多かったジェイクも含まれていた。

そして今日、いよいよジェイクはベンが古巣復帰したアラスカのコディアック基地に赴任することに。これからは教官と教え子という関係ではなく、同僚として仲良く仕事をすることができると考えていたベンだったが、現実は厳しいもので、予想以上に早く新旧交代の波が押し寄せることに……。その姿を見ていると多少寂しい気もするが、新旧交代は世の定め……？

クライマックスは……？

この映画は２時間19分と長く、最後のクライマックスがなかなかやってこない。まさかベンが引退し、ジェイクが次世代エースとして成長していくところでジ・エンドとなるはずはないと思っていたが、やはり最後に大きなクライマックスが……。今日も、今にも沈みそうな漁船の救出に向かい、荒波の中に降り立ったジェイクは船員たちの救出を完了し、最後に船室に取り残された船長の救出に……。ところが、転覆直前の船の中は不安定で、突然入口ドアがバタンと閉じられたことによってジェイクは脱出不能の状態に……。刻一刻と水は迫り、ジェイクの呼吸も困難に……。

そんな状況下のジェイクを救出すべく漁船に向かったのは、何と既に引退したはずのベン。教官と教え子との固い絆の中、伝説のレスキュー・スイマーの懸命の努力によって、やっと２人は１本のワイヤーによって救出ヘリに収容されそうになった……。さて、そんなクライマックスの結末は……？

2006（平成18）年11月17日記